

教職課程履修者の感性に関する認識の実態

森光義昭

The Actual State of Recognition of the Feelings of Students in Teacher-Training Courses

Yoshiaki Morimitsu

Overview

People's senses of values are diversified. This makes the ideal way of human relations complicated. As a result, problems with the behavior of young people frequently occur. This report asks the ideal way of the education in this situation. So far, a child was raised by its environment. So, it is possible to say this is the same about the home, too. The education of the heart is impossible in such a social situation now. The forming of the basics of a rich heart begins from infancy. Therefore, we grasp the actual state of recognition about the feelings of the student who is engaged in the child education. This report discusses the basic conception of a university curriculum from this.

要旨

人々の価値観の多様化は、人間関係の在り方を複雑にし、その結果、青少年の問題行動が多発化し、改めて教育の在り方が問われている。これまでの教育は、「子供は地域で育てられる」と言われるほど、地域社会の教育力が存在していた。このことは家族関係にあっても同じことが言える。このような社会情勢から、今改めて「心」の教育が取り上げられている。豊かな心の基礎は幼児期に形成される。そこで、将来幼児教育に携わる学生たちの感性に関する認識の実態を把握し、大学カリキュラムの基本的な構築を図るために本研究を設定した。

キーワード

豊かな心 感性 徳性 人間形成 幼児教育 学校教育 家庭教育 地域教育 道徳教育

1. はじめに

産業構造や経済流通の変化に伴って、世の中に物が溢れだし、飽食、飽物時代と言われ、お金さえあれば何でも食べられ、手に入ることが出来る時代に子どもたちが育っており、全般的に生活が生産型から消費型へと移行し家庭生活に変化が現れ始め、それぞれの発達段階におけ

る原体験が不足し、それに伴って子どもの基本的な生活習慣が定着しにくく、生活行動様式にも乱れが出てきている。そのような生活を続けてきた結果、何か困難なことにぶつかると、その壁を乗り越えることが出来ないのが現状である。また、複雑な社会構造は価値観の多様化を招き、今は自分一人で生きていけるという錯覚によって、社会の煩雑さから逃れようとして、人間関係を希薄化させている。また、家庭にあっても核家族化が進み、経済事情と相反する形で、家庭としての教育機能が低下している事実も見逃がせない。

このように、社会や家庭の状況が急激に変化し、それぞれの機関における教育の対応も遅れ、それによって問題行動を引き起こすという事象が現れている。この現象を人は教育に課題があるかのような立場を取り、子どもの教育は学校（本稿では特に幼稚園・保育所を指す）のみに押しつけられ、子どもが問題行動を起こすと、学校への責任が重くのしかかってくるというのが現状である。

学校本来の目的は知・徳・体の調和のとれた習得をめざすものである。特にそのことは幼稚園や保育所にあっては集団的な「遊び」を通して習得されるものである。しかし、今日のような複雑な社会構造は家庭・学校・地域のそれぞれの教育力の変化や低下から、学校は教育の全てを受け持つという事態を招いている。学校における教育目的の達成は家庭教育と地域社会の教育の基盤の上に立って行われることが大前提である。そのようなシステムを構築しなければ学校における教育の目的を達成させることは困難である。

2. 現代社会の時代的背景と課題

最近、毎日のように青少年の様子がマスコミで取り上げられている。これらのことは、現代の子ども自身に課題があるのではなく、子供を育ててきた社会に大きな原因がある。

わが国は敗戦から、国の建て直しを図るため、労働者養成、生産性の向上、流通の拡大など経済復興をめざすための政策が取られてきた。その結果、高度経済成長時代を迎え、国民の全体的な生活の向上の実現を見ることが出来た。店舗には溢れるばかりの商品が並び、欲しいものは何でも買えるという時代を迎えた。このような一見豊かになった社会はかつての共同社会の意識が薄れ、自分一人でも何でもできるという認識に変えさせてしまっている。そこに、社会的道徳意識が薄れ、躰を含めた道徳的教育力の低下を招き、多くの青少年の問題行動が発生している。

また、家庭的要因の面から見た場合でも、現代の子供たちは原体験が不足している。核家族化・少子化は家庭における十分な人間関係を形成するための条件がなく、例えば幼児期に兄弟姉妹などで喧嘩をするなどの人間の発達過程における適時性を持った体験が十分になされていない。したがって、以前の子どもたちは喧嘩という体験を通して、痛みを感じたり、危険な行為の限界を知ったり、あるいは逆に仲良くなる術を身につけていた。これらの社会的問題行動の起因は、幼児期の体験の在り様に関係していると見てよいだろう。また、それらのことが、道徳的感性をどのように育てるかということに関連してくるものと考えられる。

そこで、学校とりわけ、幼児教育を担っている幼稚園や保育所ではこうした社会の変化に伴

い、様々な弊害からくる青少年の問題を解決していくために、幼児期から豊かな感性を育てるために、将来教育に携わる学生の道徳的意識の実態を把握し、教員養成課程における、豊かな感性を育むための教育課程のあり方を検討することが重要であると考え。

3. 道徳教育の概要

(1) 道徳について

人間は動物的動物でありまた、理性的動物でもあるという二面性を持っている。本来人間は紛れもなく動物であることには変わらない。しかし、人間が共同社会の中で、共存していくためには動物のままでは成立しない。人間が社会的動物になるためには他の動物には見られない、思考活動に基づく行動をとっていくことが条件となる。そのためには、幼児期における感性を育てる教育を推進していかなければならない。そのことが将来、自然的、動物的な生活のみをするのではなく、また、精神的な生活のみをするものでもなく、自然のなかに調和しながら相融合した形で生活し行動を起こしていくことの出来る人間になるであろう。

そこで、この調和のとれた行動をとることが人間の道であるが、人間は本来社会的な動物であるから、特に人との関わりの中で生きているものであり、自我と他人が存在し、対人間関係や対社会関係において生きているのである。そこに道徳と言う概念の必要性がでてくる。

(2) 道徳の意義

道徳教育は人格の形成の基本に関わるものであり、教育基本法にある「人格の完成をめざす」という教育の目的そのものである。人が人格を形成していく過程は自己を主体的に形成することにあり、道徳的行為が自らの意志によって決定された責任のある行為を意味しているからである。人間は自律的な行為をすることが難しく、自己を律し節度ある行為を行うことが苦手である。しかし、教育と体験の相互作用によってより高い行動目標を確立することによって真の自立心を育成することが教育のねらいにも結び付くものである。

また、人は常に人との関係によって望ましい生き方を模索しながら成長している。その意味で道徳は「生き方」そのものを問題にしているといえることができる。その生き方を問題にしていくなかでお互いが人格を尊重していこうとする態度が形成されていく。例えば思いやりなどの心情は人の生き方を支える基盤をつくりあげていくものであり、人格形成の一つにもつながっていく。

さらに、道徳は人間社会の中で人間らしく生きようとするものでもある。人間は家庭・学校・地域社会という集団の中で生活をしている。この集団社会の中で生活することによって権利や義務と責任の連帯意識が形成され、福祉などに対する働きかけができるようになる。

今一つ、人は自然との関係においても生活を営んでおり、太陽をはじめ人は自然の力を受けながら生きている。自然は生命体そのものである。それに自然は無限の力を秘めている。そこに人間の有限性を知り、人間と自然の崇高なものへの畏敬の念が形成されるものである。つまり、道徳は①自分自身に関わること、②他の人との関わりに関すること、③自然や崇高なものとの関わりに関すること、④集団や社会との関わりに関することなどの面を持っており、人間

らしい「善さ」を求め、人格の形成を図っていくところに道徳の意味がある。

(3) 道徳教育の目標

まず、教育目標として、教育基本法では、「人格の完成」におき、人格の社会的側面を「平和的な国家および社会の形成者」として捉え、人格や社会の形成者としてもつべき資質として①真理と正義を愛すること、②個人の価値を尊ぶこと、③勤労と責任を重んじること、④自主的精神に充ちていること、⑤心身ともに健康な国民であることの5項目をあげている。また、小・中学校学習指導要領の道徳編には次のような道徳教育の一般的な目標が示されている。「道徳教育の目標は、教育基本法及び学校教育法に定められた教育の根本精神に基づき、人間尊重の精神と生命に対する畏敬の念を家庭・学校・その他社会における具体的な生活の中に生かし、個性豊かな文化の創造と民主的な社会及び国家の発展に努め、進んで平和的な国際社会に貢献できる主体性のある日本人を育成するため、その基盤としての道徳性を養うこととする。」とある。幼稚園では、このような小学校の道徳教育の基盤となるべき感性を磨き、豊かな心を育成しておかなければならない。そのためには幼児教育に携わる教師の資質として、教師自身が感性を磨いておかなければならない。

(4) 学校・園における道徳教育

従来からの学校教育は知識を中心とする学習体制により、国際的な比較の上からも一定の成果を納めてきた。特に学校ではこれまでの学力観でいう学力は「知識・理解・技能」を重視したものであった。旧学力観は戦後の新教育が始まった頃は測定可能な、「読み・書き・算」が基礎学力として考えられた。その後、昭和50年代には「学校教育が目的とする基礎的な人間の能力の総体である」とした。さらに、その後、学習内容の量的拡大と受験競争の激化により、学校現場はドリルや暗記による量的知識の獲得が最重点課題となり、知識は表面的・断片的となっていった。

そこで、中央教育審議会の教育内容等小委員会では、これまでの知識偏重の学習を改めるために、学校で学習指導する内容を価値観が多様化する社会に視点をおき、「学力基本を変化する社会のなかで生きて働く力として主体的に対応できる人間の能力・資質の土台をなす基礎能力の総体である」とした。そのために、その「基礎能力」を身につけるために、学ぶ意欲、課題を思考する力、判断する力、表現する力などを学習の過程を通して身につけさせようとした。したがって、新しい学力観は生きて働く力となる学力を身につけるために、学力の内容や形成の過程および方法を問題にしているところに大きな特徴を持っているといえる。新しい学力観はこれまでの反省の上に立って生まれたものである。このことは紛れもなく、道徳教育の目的としているものとも合致するものである。

そこで、幼稚園や保育所においても小学校の道徳教育の基礎となるべき、日常生活における規律的な生活リズムを養成しなければならない。

(5) 幼児期の道徳意識

幼児期における道徳的意識は厳密には存在していない。幼児期の行動様式は保育者の道徳的価値に基づいて、躰られたものが基本的には身につく。したがって、習慣化した行動が、快と

いう感情に結びつくようにしていかなければならない。快や不快といった感情は躰によって習慣化するものであり、習慣化したものが道徳的価値判断の基準となっていく。例えば、褒められれば嬉しいという感情はある程度、潜在的なものであるが、生活のリズムが習慣化されると、さらに快の感情が増大し、道徳的特性が養われていくことになる。

また、子供が生まれて間もない時期は、道徳的には無道徳時代と言われている。幼児は生活環境の中で、自分以外の人の存在を認識することなく、周囲の環境の存在にも気づいていない。この時、自分と他人との区別が出来ず、いわゆる未分化の状態、善悪の判断も十分には出来ない。自分にとって世話をしてくれる人のみが存在として認められるようになり、自分にとって都合のよいものが「快」として受け入れられ、その頃から、他者の存在に気づき始める。その後成長するにつれて、自分とは異なった存在の人がいることに気づき、自己と他者との存在を認識し、道徳的にも分化する。

小学校では、出来るだけ多くの経験をするを教育のねらいにしているので、幼稚園や保育所においても経験的活動の基礎となるような原体験を積み重ねることによって、活動がし易いように、また、その活動が効果的になるように実践しておかなければならない。

4. 研究の目的

現在の青少年は諸々の複雑な条件を抱えた社会で生活している。そのために、幼児期において、家庭における基本的な生活習慣が十分に身につけていない。現在、幼稚園教諭をめざしている学生が、幼少期に自分自身が保育者からどのような躰を受け、どのような生活をして成長してきたかなど、自分自身の体験による心の問題を特に中心に据え、学生の認識に対する実態を明らかにし、教育課程編成における、特に学習内容の精選や指導方法の改善への視座を確立することを研究の目的とする。

5. 研究の方法

道徳教育の内容や方法をどのような視点で捉えて、教育課程を編成するかが、今日の社会的教育課題を解決していくことになると考えられる。そこで、教職をめざす学生が、幼児期にどのような道徳的心情を育むための体験を積んできたかが大きな手がかりとなると考え、アンケート調査法により調査し、そのデータを分析することによって、その課題を明らかにし、道徳教育の編成実施のための方途を探る。

調査実施期日 : 平成18年4月 (幼児教育・保育関係の教職科目履修前)

調査方法 : 質問紙によるアンケート調査

調査対象 : 幼児教育関係教職課程学生 1年 (県内3大学合同)

対象者数 : 113人

回答数(率) : 113人 (回収率100%)

回答方法 : 該当項目の全てに解答する。(文章記述)

集計方法 : 対象者総数に対する回答率であらわす (回答は複数回答)

6. 研究の内容

21世紀は心の世紀と言われている。学校教育において児童・生徒に身につける学力の考え方も変わり、新学力観による学習指導が進められている。また、幼稚園や保育所における幼児教育に携わる指導者として、どのような資質や能力を身につけなければならないかというところに視点をおき、学生の現実的な道徳的認識の実態を探り、教師としての資質を備えるための指導計画の一助となるべき資料を得たいと考えている。そこで、現在の学生が、幼少の頃どのような道徳的体験が現在の自分を形成しているかという視点で考察を加える。

- ①心の問題に関わった体験をどのようにしてきたか。
- ②心の問題についての保育者としての基本的態度とは何か。
- ③心の問題に対して学生自身はどのように認識しているか。
- ④心の問題を教材にどのように生かして展開したらよいか。
- ⑤心の問題を学習者はどのようにとらえているか。

7. 調査の結果と分析

アンケート調査に当たっての記入方法は文章による自由記述とし、キーワード的な表現も含めて20文字程度で記述させる。また、調査時期が入学して間もない時期であるので、大学での幼児教育に関する学習は行っていない。そこで、前もって保護者に当時の状況を聞き取りさせておき、各自の幼少の時の体験を基に思い出しながら解答している。

以下、まず、それぞれの項目に関わる、論者の考えを述べた上で、アンケート調査の記述内容を分析して、考察を加える。アンケート調査の集計に当たっては、調査対象者数に対して複数回答による回答頻度を率（パーセント）で表し、頻度数の高い方から10傑（回答数の少ない設問は頻度数に応じる）を抽出している。

【全体の設問】あなたが、「教師」または「親」として、次の課題に対して、どのように考え、対応をしますか。20字以内で、簡条書き的またはキーワード的に答えてください。

（設問1）子供に「やる気」（意欲）を起こさせるにはどのような働きかけをしたらよいか。

人間は生来的に褒められると嬉しい、叱られると不快になるという感情が備わっている。このことは、人間が善さを求めて生きている動物だからである。もちろん、この感情が生まれた時から完全に備わっているわけではないので、これらの感情は日常生活の場においても「感性」として育てていかなければならないものである。

主体的とは、ある活動や志向などをする時、その主体となって働きかけること（広辞苑）とあるように、自らが

表1 やる気への働きかけ（%）

回 答 項 目	回答率
命令しないで、自分からするのを待つ	90.2
子供と一緒にする	85.3
期待をかける	45.1
子供の行動を認める	46.9
善いところを見つけてやる	32.7
善悪をはっきりさせる	30.9
プラスに評価して褒める	26.5

進んで行動することである。子供たちに自ら進んで行動できるようになるためにはどのような働きかけをすればよいだろうか。調査対象者の認識としては、表1にあるように、自分から行動することであるから、「命令しないで、自分からするのを待つ」という認識が多い。しかし、人間の感情としては、誰かの指示や命令がなければ行動に移さないというのが一般的であろう。多分待っていても、人は行動しないし、行動しなければ自主性も身に付かない。そこに、保育者が何らかの働きかけをしなければならないことになる。

保育者が子供たちに意欲を持たせるための働きかけをすることは簡単なことではない。具体的な実践の方法が見当たらないというのが実態である。したがって、「待つ」という回答が多いが、これでは一向に主体性は育たないし、行動できないだろう。

また、人は皆それぞれ善さを持っている。それが個性であるが、人が人を伸ばすためにはその善さを認めなければならない。つまり、出来たことを褒めることである。ある日小学校1年生の子供が学校から帰ってきたが元気がなかった。母親が「どうしたの、学校で何かあったの」と尋ねた。子供は水泳の時間の様子を話した。プールの端まで後3メートルの所で足を着いてしまったのである。この時、大方の人は、「それは残念だったね」、「後3メートル頑張ればよかったのにね」と声をかけそうである。しかし、この時「あなた凄じじゃない、だって・・・、と言うことは22メートルも泳げたということでしょ。」「明日23メートルを目指せばいいじゃない」と言えば、子供にとっては認められたことであり、可能性を期待されたことになる。このように、子供たちの可能性を見据えて、期待感を感じ取らせれば、人は善さを求めるという生来的に持っている感情が自らの行動に結びつくだろう。

(設問2) 子供が野に咲く花を摘んできた時、どんなふうに語りかけたらよいだろうか。

人の優しさと自然とどのように対応したらよいだろうか。また、美に対する感覚を人間の行動の中からどのように捉えたらよいだろうか。

自然に対する優しさとはどのように示したらよいだろうか。表2の回答では、子供の行動に対してのみ評価をする傾向と行動に対する問題点の指摘をしていることに分析することが出来る。ここでは子供の行動のみを評価している傾向が強く、むしろそのことをプラス評価しているように感じ取れる。花に対する美の感覚を養うことは重要なことである。しかし、一方では、自然に対してどのような対応を取るか、自然への優しさの示し方を身につけさせておく必要がある。つまり、花は自然の中で美を發揮できるものであり、自然の中で育てることが重要であるという認識を身につけさせておかなければならない。

表2 子供への語りかけ (%)

(設問3) 家庭における子育ての中で、優しく育てるための要素を挙げてみよう。

人間の人格形成の基礎となるものは幼児教育である。しかも、どのような家庭の雰囲気の中で幼児期を過ごし、成長してきたかが人格形成上重要な要因となる。

回 答 項 目	回答率
きれいだねと言う	92.0
いっぱい摘んできたね	82.3
きれいだね。なんという花かしらね	77.8
花のきれいさを一緒に感動する	53.0
お花はきれいだけど、かわいそうよ	28.3

人を育てる条件として考えられることは、幼児期における精神的な特徴はまず、自分という存在を無条件で受け入れてくれる人や場を求めるものである。保育者は子供の行為の善し悪しは別として、気持ちを汲んで、受け入れることが大切である。次に、その子の全体像の中から善さを発見し、褒めることである。褒められることについては生来的に「快」の感情が備わっているからである。子供は褒められれば自分の存在を認めてもらったと受け止めて、さらに向上心を持つことになる。

表3 優しく育てる要素 (%)

回 答 項 目	回答率
褒める	89.3
笑顔で接する	79.6
厳しさと優しさを分け与える	75.2
見守る	70.7
優しい言葉を掛ける	68.1
スキンシップを図る	60.1
思いやる心や素直な心を持つ	54.8
自分の考えや気持ちを押し付けない	33.6
植物や動物を通して生命の大切さを育てる	31.8
ペットを育てる	25.6

賞賛はその子にとっては認められることである。さらに、将来の見通しをもたせ、激励の言葉をかければ可能性を期待されていると感じ取り、意欲が増し活動に力が入り、道徳性の芽生えを育てることになる。表3では「褒める」や「笑顔で接する」と回答している者が多いが、これは自らの体験が大きく影響している。つまり、家庭における子育ての条件としての意識付けは自分自身の体験が大きな要因となっている。自分自身が、家族の愛をいっぱい受けてきた者にとってはそれらのことが重要なことであると思っている。優しい子供として育てて欲しいと思っているならば優しく接することが肝心である。

(設問4) 基本的な生活習慣を身に付けさせるために、子供にどのような関わり方をしたらよいか。

近年の産業社会は生産量の増加と市場拡大のため、就労体系が大幅に変革し、深夜就労を含む三交替制や単身赴任に伴って、また、社会の仕組みが変化し、女性の共同参画社会の推進に伴って、以前と比べると家族の者は一斉に顔を揃えるということが困難な状況になっている。

表4 基本的な生活習慣 (%)

家庭における躾は、幼児が無道徳時代において訓練によってなされなければならない。子供の成長発達に伴って、理屈が分かるようになると、合理的な考え方を全面に出すようになり、躾が困難になってくる。また、表4の回答に見られるように、基本的な生活習慣を身に付けさせるためには、指示・命令的では十分には出来ないこと

回 答 項 目	回答率
上手くできるかなと言ってさせる	77.8
一緒にしてみようかと言って自分もやる	76.1
支持をして「しつけ」をする	70.7
訓練して習慣化する	63.7
間接的に語り掛ける	58.4
行動を言葉に置き換える	55.7
支持的ではなく、奨励をする	46.0
出来るようになるのを待って、褒める	33.6
やるべき順序を教える	23.8
物事の筋道を教える	19.4

を理解している。自分も一緒にしながら、見せることによって真似ることから始めると、活動できるようになると理解している。では、なぜそのように考えているのかという問いに対しては、自分が保育者（親）と一緒に後片付けなどをしてきたことを思い出している。また、幼児教育学については現在のところ、未履修であるので、これらの認識については、過去の自分の体験を基にしたがらの構想である。躰は日ごろの訓練によって行動が習慣化するので、繰り返し実践させることの重要性についても認識している。

（設問5） 幼児の道徳性の発達にあたって何が大切なのだろうか。

一般的に人間の発達の段階を、乳児期、幼児期、児童期、思春期、成人期、壮年期、老年期に分類している。ゲゼルの発達観としての考え方は、例えば、1歳になったら、これができる、さらに1歳年をとるとこれができるようになるという、全ての子供（人）を同一視して認識する考え方であり、いわゆる「階段型」発達観である。しかし、最近ではピアジェ・ビゴッキーの発達観が一般的になっている。ピアジェ・ビゴッキーの発達観は、ある年齢になったらすべての子供（人）が同じようなことが出来るようになるとは限らない。人には個人差があり、これが個性といわれているものである。発達は、保育者（周囲の者）が導いているのではなく、子供自身であり、それはちょうど、子供が自分で「風船」を膨らませているようなものであるという新しい発達観を示したが、これがいわゆる「風船型」発達観である。

幼児期を発達段階的に見ると個人差はあるが、1歳前後までは「無道徳時代」である。したがって、この時期の道徳性の芽生えの基礎づくりは家庭における「しつけ」が指導の中心的方法となる。しつけの基本は訓練（ドリル）によってなされるのが一般的であるので、学習というよりも指導そのものであるといえる。幼児の行動様式はしつけにより習慣化したものであるが、これが道徳性の芽生えの基礎となる。そこで、家庭における日常生活場面における道徳性の芽生えの育成のための幼児に対する親の関わり方については、表5のように、絵本の読み聞かせに代表されるように、人と人との触れ合いが重要であることを認識している。

道徳性の発達は幼児期にその基礎が形成される。特に、人と人との触れ合いは最も重要である。

最近では、全ての者が職業につき、職場と家庭との両立を目指しているが、家庭の教育的機能が十分に果たされていないのが現状である。最近では産業構造が変化し、家庭生活の様式も様変わりをしている。したがって、以前に比べると親が子供に十分に関われないような状況になっている。そのため、炊事の時間帯は子供の世話をテレビ（ビデオ）に委ねているという状況である。子供向けのテレビ用ソフトが数多く出回り、情報化社会と相まって

表5 道徳性の発達 (%)

回 答 項 目	回答率
絵本の読み聞かせをする	86.7
テレビに頼りすぎた子守をさせない	82.3
人やものを大切にする教育をする	76.1
人と仲良くさせる	65.4
友達や自然と触れ合う	57.5
いつも子供と向き合い、共感する	45.1
美しいものを一緒に見て感動する	34.5
多くの友達をつくってやり、遊ばせる	30.9
いつも、「有難う」の気持ちを持たせる	29.2
感動体験を沢山させる	22.1

便利に活用されている。しかし、前述したように、子供への感性の導入は、機械（ビデオ）によってなされるものではなく、人と人との触れ合いによってなされるものである。例え、テレビを幼児に見せる場合でも一人では見せないようにしなければならない。日本小児科学会の調査によると、テレビを見せる場合、親と一緒に見る子供はそうでない子供との比較において、言葉の理解、人見知り、運動能力の発達などに10～20ポイント上回ることが分かったという。これらのことは道徳性の芽生えの基礎になるものであり、絵本と同じように親が子供に語りかけながら見ることの重要性を指摘していると言える。

また、日本小児科学会はテレビについての提言を次のようにしている。①2歳以下の子供には長時間テレビやビデオは見せない。②テレビはつけっぱなしにしない。③テレビ、ビデオは一人で見せない。④授乳中や食事中はテレビをつけない。⑤見る時は必ず話しかけたり一緒に歌ったりする。⑥年齢や発達に応じた番組やビデオ教材ソフトを選定する。これらの点に留意しながらテレビと上手に付き合うことが重要なことである。

今、情報媒体は子供たちの生活の中心的存在となっている。特に、テレビは取り扱いが手軽であり、家庭生活に浸透しており、情報を収集する手段としての利便性は高い。しかし、安易にテレビに子育てを頼り過ぎると、道徳性の芽生えにも影響を与えかねない。

（設問6）幼児教育における「愛」とは何だろうか。

ヒトが人間になるためには、教育を受けなければならない。人間が生物体として受け継いでいるDNAは限られている。潜在的な素質は学習の効果によって、発揮できるものである。しかも、人間は感情の動物であるといわれているように、感情表出が環境や条件によってどのようになされるかが重要な課題となってくる。

また、思いやりとは自分が相手に対して、援助しようとする気持ちの現れであり、そのことが行動に現れても、決して、その見返りとしての報酬を意識的に持たないものである。つまり、奉仕の精神（ボランティア）と通じるものがある。自分が行った行動の結果に対して他人（外部）からのそれに対する報酬を期待することなく、他人のためになったり、社会への福祉に貢献することを指している。

表6 愛とは何か（％）

愛は何かという設問は抽象概念の最たるものである。したがって、表6に見られるように、回答率が他の設問と比較するとあまり高くない。しかし、漠然とした認識の中にも、「子供を信じる」という考え方は、円満な人間関係を形成するための重要な要因であることは理解しているので、認識の枠組みは出来ている。また、子供は遊びを通して学習するし、そのことによって成長発達するものであると認識している。

回 答 項 目	回答率
子供を信じること	47.7
触れ合うこと	45.1
子供を包み込むこと	40.7
子供の全てを受け入れること	37.1
一人一人の存在・個性を尊重すること	36.2
善いことをしたら褒めること	23.8
思いやりを持つこと	19.4
子供と向き合うこと	15.9
共感し、心を通わせること	12.3
待つこと	10.6

(設問7) 幼稚園や保育所はどんな役割を担っているところだろうか。

生産技術の飛躍的な発達、生産の拡大や増大をもたらし、産業社会における構造を大きく変化させている。また、このことが家庭の事情にも影響を与えている。以前の家庭生活は、基本的生活の態度である、洗面、歯磨き、服の着替えなどの身の回りの整理整頓が自分の力で出来るように日常的に習慣付けられたものであるが、最近は就労体系の変化に伴って、保育者が十分に子供に関ることが困難な状況となっている。

本来、幼稚園や保育所は集団的生活のリズムについて、遊びを通して体験的に養っていくところである。しかし、現在の子供たちは、集団社会における生活の基盤となる基本的な生活習慣が身につけていないために、さまざまな課題を抱えている。幼稚園や保育所での生活を成立させるためには、家庭で行うべき躰が身につけていることが条件である。しかし、家庭で行うべき躰まで園や保育所に任されており、家庭の教育機能も請け負っているのが現状である。このことは表7にあるように、総体的には幼稚園や保育所

表7 幼稚園や保育所の役割 (%)

回 答 項 目	回答率
心と身体を成長させる所	89.3
コミュニケーションを身につける所	84.9
集団行動が出来るようになる所	82.3
思いやりの心を育てる所	76.9
子供の感性を育てる所	75.2
心の成長を助ける所	70.7
子供の健康を管理する所	68.1
集団生活での基本を身につける所	53.9
家庭教育のサポートをする所	29.2
家庭に代わって子供を育てる所	10.6

の機能を集団生活のリズムを体得する所であると認識しているが、一部、「家庭教育のサポートをする所」であるとか、「家庭に代わって子供を育てる所」であると認識していることは、社会の背景を映し出していると言える。

(設問8) 子供の「遊び」における教育的意義は何だろうか。

人間は生まれもって、何らかの形で自分を表現しようとする欲求を持っている。しかし、現代の生活の様相は、他人と一緒に遊ぶことが以前に比べると減少している。以前は地域の広場で異年齢による集団での遊びが通常であった。最近では室内で、パソコンゲームをしたり、映画(アニメ)などのビデオ(DVD)観賞をしたり、人との関わりなしに時間を過ごすことが多くなっている。

今の大学生が幼少の頃はすでに高度経済成長時代の社会背景の中で生まれ育っており、一緒に遊んだ体験が少ない。したがって、集団の中に入り込んで遊ぶことの具体的な方法を知らない。表8にあるように各自に体験がないため、「一緒に遊んで遊ぶことを教える」とあるように抽

表8 子供の遊び (%)

回 答 項 目	回答率
保育者も一緒になって遊ぶ楽しさを教える	53.9
みんなで楽しいゲームが出来るようになる	49.5
友達と仲良くすることを覚える	44.2
遊ぶことによって社会性が身に付く	32.7
想像力・創造力が高まる	23.8
感受性が育つ	13.2

象的であり、そのためにはどうするかということが表現されていない。わずかに、集団で遊べるようなゲームの機会をつくるという回答も見られる。

(設問9) 子供に「豊かな感性」を育てるために、どのような経験をさせることが大切だろうか。

人間は感情の動物であると言われている。たぶん、人間以外の他の動物もある種の感情は持っていると思われるが、しかし、それは、自己を守るための防御や攻撃に対する表現としての行動である。それに比して、人間の場合は、他人との関わりにおいて、他の人々を受け入れるという感情を持っている。このような感情であるいわゆる愛情、優しさ、思いやり等といったものは幼少期において育てることが重要である。

人間の豊かな感性は感動体験から生まれる。しかもその感動は本物との出会いによって作り出される。前述したように幼児にとって絵本との出会いは美術との出会いであり、豊かな感情、特に道徳性の芽生えを育成する出発点となり、特に「美しいものとの出会い」が感性として育つことになる。したがって日常的に、例えば部屋に飾られた花を見ては、「お花がきれいなね」と語り掛け、町を歩いて出会うペットを見ては「かわいいね」と話しかけたりすることは、「美」に対する関心を持つ重要な要因となる。つまり、日常生活における本物との出会いこそが重要な体験の場となることは、表9にあるように十分に認識している。

人間は本来、「美は善」であり「善は快さ」であるという感情を持っている。豊かな感性を育てるには美への表現物に接することである。家庭教育の一環として美術館や音楽会の会場へ行き、すばらしい絵画や音色に出会い、本物の芸術に触れることによって、美への感性が養われ、道徳性が芽生えることになる。

感動の心は「体験」によって育まれるものである。その体験は本物との出会いが重要である。本物とは、おもちゃやぬいぐるみなどのような人間が作り出したものではなく、自然や動物（ペット）を指している。また、絵本の場合は、絵や文字は間接的な情報媒体であるが、保育者が子供と一緒に読み聞かせをすることによって、人との関わりという点において本物との出会いと見てよいだろう。特に出会いの中でも、「美」を対象としたものは最も重要である。美に対する「快」の受け入れは先天的なものが備わっており、きれいなものを見せる、触れるという機会はより深い豊かな感情を育てていくことになる。設問9も「感性」とは抽象概念であるため、表9の通り他の設問と比較すると回答率は高くないが、自然や人間（特に友人）や動物との触れ合いが重要であるという認識は持っている。

(設問10) 自分が幼かった頃に育った「環境」がどのように変わったと感じているか。

幼児期における豊かな心情を育むための生活上の環境は重要な条件の一つである。幼稚園教

表9 子供の感性 (%)

回 答 項 目	回答率
自然（本物）の中で遊ぶ	46.0
動物（本物）と触れ合う	42.4
沢山の友達と関わらせる	38.9
出来るだけ多くの実体験をさせる	28.3
沢山の絵本を読んであげる	20.3
美しいものに触れさせる	18.5

育要領でも、幼稚園教育は環境を通して行うことを基本としている。子供たちの学びの場としての環境は固定化することなく、遊びや学びの現場としての環境を整備し、幼児自身が自ら活動することが出来るようにすることが重要である。

幼児にとって自然は学びの最適な場所である。その場所がわずか15年ぐらいの間に大きく変化していると多くの者が感じている。自然が少なくなったということは幼児にとっては学習する場が少なくなったということである。したがって、前項で取り上げたように感動的な体験をする学習の場が少なくなっているということだろう。環

境の変化については表10の通りで、他の設問のように回答率は高くはないが、自然や遊びの場所を学習の場として捉えていることは、保育者としての認識が十分に備わっていると解釈すれば、今後の幼児教育の学習の場をどのように条件整備していくかということに対する関心が得易いことになるだろう。

(設問11) 子供が「遊び」やいろいろな「活動」から何を学ぶことができるか。

幼稚園教育要領にも示されている通り、「遊び」は子供たちにとって学習そのものである。各領域に示すねらいは、子供たちが幼稚園を終了するまでに育つことが期待される生きる力の基礎となる心情、意欲、態度などを指している。心身の健康に関する領域「健康」、人との関わりに関する領域「人間関係」、身近な環境との関わりに関する領域「環境」、言葉の獲得に関する領域「言葉」、及び感性と表現に関する領域「表現」(幼稚園教育要領)など、全ての領域が「遊び」を学びの場として位置づけることが重要になってくる。したがって、遊びが子供たちにとって大切な時間である。

人は誰でも「遊ぶ」ことには積極的な動物であるといっていだろう。それにも増して子供は遊びの天才といわれるほど、遊びについては創意工夫を加えながら、エネルギーを注ぎながら取り組むものである。しかしそのように言われていたのは以前の子供のことであり、最近では、集団で遊ぶことが出来ない、遊びが長続きしない、遊びについて指示されないと遊べない、遊び方が分からない、遊びに工夫が見られないなどの現象がみられるようになっていく。

表11にあるように、実態としては、遊びが子供たちの学習につながっているということの認識は

表10 幼少期と現在の環境の変化 (%)

回 答 項 目	回答率
自然が少なくなった	46.0
自然の中での遊ぶ場所が少なくなった	44.2
地域社会との関わりが少なくなった	38.9
物質的に豊かになった	25.6
教育的環境が変わった(教育への関心)	18.5
緑の部分が少なくなった	15.0

表11 遊びや活動の学習 (%)

回 答 項 目	回答率
社会性を身につける	61.0
生活力が身につく	57.5
創造力が身につく	52.2
人間関係をつくる	51.3
体力をつける	43.3
精神的を身につける	36.2
相手を思いやる気持ち	32.7
生きる力を養う	29.3
感性を育てる	26.5
学習する	21.2

持っている。学習そのものであると答えている者にとっては具体的に子供のどのような成長発達に関連しているかを明確には認識していない。遊びによって形成されるものについては、人間関係を取り上げている者が半数ほどいる。遊びによって仲間意識が生まれ、切磋琢磨しながら人間関係が形成されていくことを認識している。

(設問 12) 子供たちに「善いこと」と「悪いこと」を自覚させるためにはどのようなことが大切だろうか。

乳児期の期間は、的確な道徳的判断が出来ない無道徳時代を過ごす。言語活動が活発になる頃から、道徳的判断力は身についてくる。しかし、一方では友達との交流によって、いろいろなことを体験する。子供がよい子になるようにと思って、活動（行動）を規制すると、枠の中でのみの活動になり、想像性や創造性が十分に発達しない。子供をよい子に育てるには、子供との触れ合いが大切である。十分な触れ合いによって、愛情を感じ取ることによって、躰の面も効果的になる。

心の交流が出来ていなければ、子供は納得するどころか反抗的になるだろう。心の触れ合いがあってこそ、叱っても心に食いつくことが出来る。また、躰の場合の価値観は常に一貫しておかなければならない。時と場合によって判断に違いが出てくると、躰の効果は半減する。さらに善い行いをした場合は、褒めるということが大切である。前述したように人間は本能的に褒められることには「快」の感情が備わっている。それは人から認められたことになるからである。

表 12 善悪の認識 (%)

回 答 項 目	回答率
相手がどんな気持ちかを考えさせる	88.4
善いことは褒めて悪いことは叱る	87.6
遊びの中で考えさせる	76.1
大人がお手本を見せる	69.9
善いことを体で感じさせる	57.5
子供と一緒にやる	46.9
いつも優しく接する	45.1
行動の原因を考えさせる	36.2
自分に置き換えて考えさせる	22.1
納得するまで説明する	15.0

幼児が何かの行動をした時、ほとんどの場合は他人の存在を感じていない。自分の欲求のみが優先される。自分の行動が、周囲の人々にどのような影響を与えているかを考えさせ、そのことが、相手も「快」と感じているのか、または「迷惑」という感情を抱いているのかを考えさせなければならない。表 12 にあるように、「相手がどんな気持ちかを考えさせる」という回答は、善悪の判断を身につけさせるための指導の観点として、的確な認識を持っていると判断できる。

(設問 13) 幼児期に言語能力をしっかりと育てておくことが大切であると言われてるのはなぜだろうか。

幼児期の特徴の一つに、人に話をするを好む。よく、「ママ、ママ、聞いて」というような光景が見られる。幼児期における言語力の獲得は飛躍的に増大する。幼児の生活の範囲が家庭生活の範囲である時は家族との会話によって獲得していくが、幼稚園や保育所へ通園するようになると、友達との会話によって、単語の羅列であったものが、文法上のつながりを持つ

ような文章体の会話が出来るようになる。会話は、自分が体験した内容などを頭の中で思い浮かべ、文章に置き換えて発生させる活動である。さらに、会話を成立させるためには相手としての聞き手の存在が重要になってくる。つまり、話し手と聞き手の共同作業が、同一視された時に成立するものである。

表 13 に見られるように、幼児期に言語・会話能力が発達することは、経験上からも、十分に認識している。また、会話能力はなぜ必要かということについても、他人を十分に理解するためのものとしてその認識は深い。会話によって自分の気持ちを他人に伝えたり、人の気持ちを知り得たりする。人を理解して初めて人間関係の深まりが出来てくる。人と仲良しになることの術を体得しているのです、豊かな感性を育むた

表 13 言語能力の重要性 (%)

回 答 項 目	回答率
自分の気持ちを正確に伝える	66.3
発達過程で最適な時期である	63.7
人とのコミュニケーションが大事	61.0
人間関係が深まる	52.2
他人を理解するため	47.7
心が豊かになる	33.6

めの条件として重要であること理解している。幼児が話し上手になるためには、聞き手の態度が大きく関わってくる。沢山のことを話させるためには、話題を提供することが一つの条件になってくる。保育者は常に幼児の話を全面的に受け入れ、反応を示し、話しに連続性を持たせるための合いの手を入れるなど、援助的な関わりを持つことが重要である。

(設問 14) 絵本の読み聞かせで大切なことは何だろう。自分自身が体験してきたことを思い出してみよう。

人間は本来、人との関わりを求めて生まれてくるものである。しかも、そのことは幼少の時ほど、人との関わりが重要である。最近の幼児向けの絵本は情報化社会の波に乗り、電子ブック的なものが数多く出回っている。保育者も社会生活の複雑な様相から、子供に正対できず、テレビでお守りをしてもらったり、絵本を持つ傍ら、カセットテープが読み聞かせてくれたりしている。しかし、言うまでもなく、機械では人の感情を伝えることは出来ない。保育者と幼児が正対することにより、スキンシップを取りながら、肉声による伝達こそが、豊かな感情を育てることになる。そのことは、幼児体験を想起して、絵本の読み聞かせで何が大切であるかを理解している。

絵本は次のような三つの道徳的心情の基礎を養う要素を持っている。

- ① 美への感性を育てることが出来る。絵本との出会いは保育者から読んでもらうことからスタートする。その意味で、絵本に描いてある絵は最初に出会う「美術」である。その美術を見ることによって、美への感性を育てることができる。
- ② 言葉に対する力を育てることが出来る。絵本の中に書いてある文章を読み聞かせすることによって、表現能力が発達する。テレビを一人見する子供よりもはるかに発達する。

(4. テレビの項を参照) 絵本の読み聞かせによって、保育者(親)から子供へと愛が伝わり、人間的なふれあいを通して、豊かな道徳的心情が養われる。

- ③ 豊かな心を育てることが出来る。絵本に描かれている絵や文章は、子供の心を捉えて作られている。絵本に表現してある物語は、子供の姿そのものを表わしている。したがって、発達の程度に応じた絵本を提供することによって、豊かな心を育てることができる。

幼児は本来お話が好きであり、絵本が好きである。絵本は子供の情緒を安定させる力を持っている。特に絵本に描いてある絵を見ていると心地よい感性が伝わってくる。しかし、絵本はただ単に与えるだけでは有効なものにはならない。親が子供と触れ合いなが

ら、絵本の中に描いてある絵や書いてある文章を読みながらその時の子供の反応や様子を読み取り、親の言葉を付け加え、「今、クマさんはどんな気持ちだろうかね」と問いかけることによって、子供の想像力を育てていくこともできる。絵本を通して親子のふれあい活動によって豊かな感情が芽生えてくる。絵本には図形や色彩を用いて表現されたものに対する想像力が養われ、お話を集中して聴く力や知的な好奇心を増大させるものを持っている。また、絵本の筋書きを通して人としての持つべき豊かな感情を養うことができる。表14にあるように、絵本の場合は、「生の声で読んであげる」とあるように、保育者が直接関わってこそ、その教育的意味があると考えている。「テープなどを使わない」と解答しているように、絵本の持っている本来の機能を十分に理解している。

(設問15) おもちゃを部屋いっぱいに広げて遊んだ状態を見て、教師や親はどんな対応をしたらよいか。

幼児が身体的に発達してくると動きが活発になり、「遊び」という活動が加わってくる。その遊び(学習)には「道具(教具)」としての「おもちゃ」が必要になってくる。家庭内におけるおもちゃによる遊びは幼児にとって重要な学習である。幼児が身体的にまた精神的に発達してくると、自分の身の回りのものに興味・関心が広がり、おもちゃによる遊びの活動が始まる。この時期にあまり多くのおもちゃを与えすぎると、一つのことに集中する力を育てることができないので留意しなければならない。また、一つのおもちゃから他の活動に移る場合、必ず後片付けの習慣をつけさせるようにする。その場合、「後片付けをしなさい」という指示的なものではなく、「ウサギさん(ぬいぐるみ)もお家(おもちゃ箱)におねんねしないと風邪をひくよ」、「このままではウサギさん、寂しいよ」などと語りかけながら、一緒に片付けることが大切である。この時、重要なことはおもちゃを自分と同じ仲間であるという認識を持たせることである。このような働きかけによって、幼児は仲間に対する思いやりの感情を持つよう

表14 絵本の持つ教育力 (%)

回 答 項 目	回答率
生の声で読んであげる	95.5
感情を込めて読むこと	88.4
子供と会話をしながら読んであげる	79.6
読むのではなく、創作して語りかける	68.1
絵をしっかりと見させる	53.9
テープなどを使わない	45.1
絵を見て創造させる	34.5
絵本の世界に入り込ませる	19.4
役になりきること	15.9
余韻を大切にする	11.5

になっていく。

表 15 物の大切さのしつけ (%)

幼児期において、おもちゃは学習用具として重要なものである。おもちゃも保育者が与える観点によっては子供の発達に大きく影響してくる。ブロックは組み立て方によっていろいろな形のものができる。自分で工夫して遊ぶことが

回 答 項 目	回答率
一杯遊んだね、次は遊ぶ場所をつくろうね	47.7
おもちゃがお家に帰りがっているよ	31.8
ぬいぐるみさんも眠たいといっているよ	28.3
沢山遊んだことを一緒になって喜ぶ	19.4
遊んだ後は片付けの躰をする	10.6

できるような物を与えることによって、創造性を培うようにしていかなければならない。

表 15 にあるように、多くの回答が沢山遊んだことを褒めて、自分（保育者）も一緒になって片付けをするような指導の方法を理解している。また、「ぬいぐるみさんも眠たいといっているよ」などと語りかける方法などはおもちゃを擬人化し、友達としての存在を意識させる上で、効果的な方法であると思われる。一方で、「後片付けをしましょうね」などの抽象的な方法の回答に留まっている回答もある。いずれにしても、子供をしつける場合、まずは行動をプラス評価し、その上で改善すべきことを保育者が一緒になって活動させるという方法が効果的である。

8. 研究の成果と今後の課題

これまで述べてきたように、幼児教育は人間形成の基盤となる時期として最も重要な時である。そのことは学生自身が、今自分自身が教師や親であると仮定した時、子供たちの諸々の状況に対してどの様な関わりを持ってばよいかという課題に対して、幼児期の体験を基にしなから回答していることから言える。つまり、自分の体験が物事の判断の基準となっていることを示している。

今回の調査結果は、保育者として、人と人との関わりにおいて、どのようにすれば豊かな心を育むことが出来るかという課題に対して、一つの視座を与えていると思う。また、教職課程科目の履修学生が豊かな心を育むための基本的な考え方に対する認識と、これまでの体験とがどのような関わりを持っているのかという視点に立って、実態の把握に努め、その一方途を述べてみた。

青少年の社会的問題行動や学校不適応が問題にされている現状は人間形成の基盤である幼児期における教育の在り様を指摘しているものであり、教師一人一人にも課せられた課題であり、改めて学校（園）では何をなすべきかという課題が突き付けられているようである。そのためにはまず教師が、「自分自身の感性」を磨くことから出発し、これまでの経験を生かしながら、幼児教育に携わっていかなければならない。とりわけ道德教育の充実が叫ばれている現状で学校現場の道德教育のさらなる充実発展が望まれる。学校における道德教育の充実で全てをカバーできるものではないが、少なくとも学校教育に携わる教師がそうした子どもの健全な育成を願う中で、家庭や地域社会と連動しながら実践を積み重ねていく中で、新しい理論を構

築していかなければならないと考えている。また、この調査でのデータをクロスしながら意味づけをしていけば、より一層科学的に判断できるのではないかと思われる。

参 考 文 献

- 中留武昭 『総合的な学習—成功のカギ—』 ぎょうせい 2000
小田 豊 『新しい時代を拓く幼児教育学入門』 東洋館 2002
小田 豊 『幼児教育再生』 小学館 2003
秋山俊夫 『いま、保育を見直そう』 北大路書房 1991
杉原一昭 『心を育てる幼児教育』 教育出版 2002
阿部和子 『乳幼児期の「心の教育」を考える』 フレーベル館 2001
小田豊・押谷由夫 『保育と道德』 保育出版社 2006
飯田芳郎 『現代道德教育考』 文教書院 1998
文部省 『学習指導要領—道德編—』 文部省 1998
文部省 『幼稚園教育要領』 フレーベル館 1998
村井実 『人間と教育の根源を問う』 小学館 1994
教師養成研究会 『道德教育の研究』 学芸図書 1995
教職課程研究会 『新教職論』 実教出版 2001
亀井浩明・有園格・佐野金吾 『中教審答申から読む21世紀の教育』 ぎょうせい 1998
工藤文三・佐野金吾・小島宏 『総則改正・中教審答申』 ぎょうせい 2004